

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

5

2015

特集 10年先の水田農業を描く



特集

10年先の水田農業を描く

3 水田農業コストダウンの可能性と課題

秋山 満

水田農業をめぐる経済環境は厳しさを増しており、将来不安も広がっている現状に、米生産費の削減の可能性について4つの項目に分け検討する

7 水田畑輪作体系の構築に活路を見いだす

梅本 雅

米価下落が止まらない今、水田利用の在り方を見直すべく、水稲中心の水田輪作体系から畑輪作体系への転換が必要と説く筆者が取り組みを紹介

11 常識にとらわれない自己変革で変化に対応

横田 修一

先進的な大規模稲作経営における生産の合理化への取り組みを紹介するとともに、現場から見た水田農業の将来像を探る

情報戦略レポート

15 規模拡大・多角化の発展段階に応じた経営資源の活用が高収益の鍵

—稲作経営における収益性分析調査—

経営紹介

経営紹介 特別企画「アグリフードEXPO東京2015」

23 一産取り肥育のF1十勝ハープ牛 販路拡大に商談会が役立つ

株式会社ノベルズ／北海道

商品にふさわしい価格で販売するためには、価値を伝えることが大切と、アグリフードEXPOで販路を拡大。マッチング形式の商談会が役立つという

変革は人にあり

25 高井 眞佐実

株式会社赤城深山ファーム／群馬県

「そば屋が求めるソバを生産したい」との想いが増し、そば屋からソバ専作農家に転身。夏ソバと秋ソバの二期作や加工・販売を手掛ける六次産業化を実現



撮影：伊東 剛
北海道美瑛町
2008年6月9日撮影

広大な丘での植苗作業

■畑一面に張られたマルチは、広大な丘に描かれたしま模様のような。穏やかな日差しの中、トウモロコシの苗が丁寧に植えられていく■

シリーズ・その他

観天望気

連携を支える「プロの脇役」たち 大浦 久宜 …… 2

農と食の邂逅

ひふみ養蜂園株式会社 尾形 玲子

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) …… 19

耳よりな話 158

母乳による免疫 松原 豊 …… 22

フォーラムエッセイ

農業に笑いを 三遊亭 兼好 …… 28

まちづくりむらづくり

「THE 日本のご田舎」を舞台にして
「田舎生活」の選択肢を全国に発信中

たつみ かずき …… 29

書 評

池澤 夏樹 訳『古事記』

宇根 豊 …… 32

インフォメーション

エリア限定商談会で販路開拓を支援

日本プロ農業総合支援機構 …… 33

第10回「アグリフードEXPO東京2015」を開催します

情報企画部 …… 34

風評被害克服に向け個別商談会を実施 福島支店 …… 35

公庫資金への理解を深める研修会を開催 前橋支店 …… 35

再建遂げた企業のリーダーが漁業関係者の会で講演

長崎支店 …… 35

「やまぐち六次産業化・農商工連携研修会」を開催

山口支店 …… 35

「農の雇用事業」で人材育成・経営発展へ …… 36

交叉点 アジアの農業金融関係者が奈良県の先進農

業を視察 奈良支店・情報企画部 …… 36

みんなの広場・編集後記 …… 37

ご案内

第10回アグリフードEXPO東京2015 …… 38

望天 観気

連携を支える「プロの脇役」たち

企業が一日一社のペースで農業に参入している。

「一〇年間で法人数を五万に」という政府目標の達成にはまだ少ないかもしれないが、二〇〇九年の農地法改正以降緩むことなく続いている傾向である。さらなる加速化を期待したい。

直接参入の方法以外にも、農業活性化に取り組む企業は多い。地域の農業者と信頼関係を築き、自社の製品・ノウハウを共同開発する企業や、六次産業化に取り組む企業など、その裾野は広がりつつある。こうした連携の取り組みは、将来の参入を志向する企業にとって、栽培技術の習得や耕作に適した農地の確保といった参入時のハードルを下げることにもなる。

経団連が今年一月に取りまとめた政策提言にも、農業界と経済界の連携を重点的に支援する施策の拡充がうたわれており、経済界側の熱意は大いなる高まりをみせている。

農業の現場はどうか。「このままではいけない」と考える農業者は多くても、「新たな技術を導入しよう」といった具体的な行動を起こせる経営者はまだ少数ではないか。ある自治体関係者によれば、「企業」と聞いただけで拒否反応を示してしまう地域もあるという。熱心に取り組む農業者や地域のエネルギーを他にも展開していくためには、何が必要か。

ひとつの鍵は、連携を仲介する「第三者の存在」にある。

依頼者を訪問した回数だけで金銭を請求するような「自称経営コンサル」のことではない。生産、販売、経営に関する知見を有し、効果とリスクを客観的に説明できる専門家。この有無が連携の成否を大きく左右する。特に金融機関などは、農業者の身近でその経営方針や経営状況をよく理解して、身の丈に合ったアドバイスを提供できることが多い。さまざまなケースで企業との連携の前進に決定的な役割を果たし得ると実感している。

「この農業者さんには、きつとあの企業の技術が役に立つはずだ」——そう確信しつつ、あくまでも脇役に徹して現場で汗を流す金融マン。そんな存在に敬意を表し、これからも一人でも多くの農業者の力になってほしいと願う。

EY総合研究所株式会社 主席研究員

大浦 久宜



おおうら ひさのり
1961年兵庫県生まれ。84年に東京大学農学部を卒業後、農林水産省に入省。2014年4月から官民交流によりEY総合研究所(新日本有限責任監査法人の子会社)に転向中。

自然が変化して
飼育がしづらくなる
巣箱の前では
蜂と同じ気持ちに…
私も自然の一部ですから

農と食
の邂逅

尾形 玲子 さん

千葉県館山市

ひふみ養蜂園株式会社 代表取締役

人類が初めて口にした食べ物が蜂蜜といわれる。しかも蜂蜜は、神が授けた最も神聖な黄金色に由来する。養蜂は花蜜を採集するため危険を冒しながら、花を追って移動する重労働。日本でも数少ない女性養蜂家である。





P19: 蜂が活発に動き出す春は玲子さんにも特別な季節
 P20: 植物や動物に生命力を与える自然の持つ大きな春の力は「こい」と「フログ」につづる(右上)と左蜜を採る花により蜂蜜の色や香りは異なる(右下)枚

蜂の世界はキラキラ女子力

満開の菜の花のそばに置かれたいくつもの蜂の巣箱。その一つに近づき、蜂の動きを抑えるための煙を吹きかけながらそつとふたを開ける。箱の中に垂直に掛けてある巣板を一枚ずつ持ち上げ、蜂の数や動き、蜜の状態をチェックしていく。蜂がびっしりと張り付いた板もある。「これはいい状態。養蜂家にとってたまらない瞬間です」と女性養蜂家、尾形玲子さん(五六歳)はほほ笑む。

よく見ると菜の花だけでなくビワの木も植わっている。このビワも蜂たちにとっての蜜源となる。秋口から冬にかけて咲く白い花の蜜を蜂たちは集める。玲子さんはこれを採蜜して希少な「ビワ蜜」として商品化している。

一つの巣箱にいる約二万匹の蜂は、一匹の女王蜂、雄蜂、働き蜂の三種類からなる。雄蜂と交尾した女王蜂はひたすら卵を産む。かえった蜂はほとんど働き蜂となり、花の蜜をせっせと集めては蜂蜜を作ったり、外からの攻撃に対し針で巣を守る。働き蜂は全て雌。「蜂の世界はキラキラ女子力で成り立っていますよ」と玲子さん。

養蜂家が採蜜するには、蜜を吹く花が豊作であることや蜂が元気に動ける適温の日が続くことなど、大半は自然環境に委ねるしかない。その中で養蜂家にできることは、働き蜂が元気に蜜を集められるように蜜をたくさん吹く花の近くに巣箱を置いたり、

女王蜂が産卵しやすい環境を作るために巣箱を小まめに観察し、巣板が働き蜂でいっぱいになれば巣板を追加したり、巣箱を二段重ねにしたりすること。

「巣箱もこちらが置きたいところに置けるものじゃないんですよ。地主さんとしてかりした信頼関係を築いているかどうかに尽きます」と玲子さん。ひふみ養蜂園は現在四〇〇もの巣箱を、館山市と南房総市内の二〇カ所に置いている。「父のおかげで、蜂にとっていい場所に置かせてもらっている。本当に感謝しています」とこくになった父、一二三多作さんに思いをはせる。

子育てしながら養蜂の世界

そんな玲子さんも仕事を始めた頃は「渋々でした」と打ち明ける。多作さんが故郷の青森県で養蜂を始めたのは戦後間もなく。寒さに弱い蜂のために東北地方の養蜂家は冬になると、温暖な千葉県に巣箱を移して越冬させる。そして春になると花の開花と共に北上していく。小学校入学まで玲子さんも両親について移動養蜂の旅に出た。「トチの蜜やローヤルゼリーを採るために、初夏は十和田市の電気もガスもない山の中でのテント生活。子どもだからそれが当たり前だと思っていましたね(笑)」

専門学校を卒業し、館山市にある直売所で蜂蜜販売に専念していたが、多作さんが体調を崩すと、二人姉妹の長女である玲子さんは養蜂の仕事にも携わるようになった。



折しも、二人目の子どもの出産直後で、「育児や家事と養蜂の掛け持ちで新聞を読む暇もなかった。世界で一番働いている気分でした」。それでも続けてこられたのは、「子どもも蜂も生き物だから放っておけなかったし、学生時代にバスケットボールで鍛えた体力のおかげかな」

多作さんが過去に男性スタッフを雇ったこともあったが、なかなか長続きしなかった。「巣箱を置いて蜂蜜を採るイメージが強い養蜂業ですが、実は、きつい、きついと何度も言いたいほど、体力勝負の仕事です」と玲子さんは言う。

一年間の主な仕事を聞いてみると、なるほど納得がいく。花が咲く春には女王蜂を産卵させるための管理、世話で追われる。「一年間の成績を左右する仕事なので最も緊張する時期」と玲子さん。一方で、花粉交配が必要な果菜類や果物を作る農家に蜂を貸す仕事も始まる。蜂の働き次第で作物の品質が決まるため、ベストな状態で貸し出す調整作業が欠かせない。

六月頃、玲子さんはアカシアの花を求めて秋田県に蜂を移動させる。夏になればスズメ蜂対策に追われる。スズメ蜂は蜜蜂も蜜も幼虫も食べてしまう天敵だという。秋から冬は産卵のペースが落ちるため、通常の養蜂家は蜂を休ませながら越冬させるが、玲子さんはビワ蜜を採るために、秋口に入ってから産卵させる仕事が続く。一年を通じて休む間はない。そして、「どんなに



蜂蜜を活かしたドレッシング、ぼん酢、ジュースなど数々の商品を開発(上) 玲子さんの趣味は歌。「全てを忘れる瞬間が最高です」(下)

経験を積んでも蜂に刺されます」

人間も自然の一部を実感

「家業を廃れさせるわけにいかない」との義務感から継いだ養蜂業だったが、いつしか蜂だけが持つ高い能力、けなげに働く蜂たちに玲子さんは「尊敬の念すら抱くようになった」と言う。

蜂が採ってきた蜜はその時点では蜂蜜ではなく、水分の多い花蜜。蜂から蜂へと口移しで運ばれ、胃袋を何度も通るうちに体内の酵素の働きにより、人間が決して作り出せない栄養価の高い蜂蜜になる。一匹の蜂が生涯を懸けて集める蜜はわずかスプーン

一杯分。この話を聞いた後、菜の花畑で巣板に溜まった蜂蜜を指ですくって食べさせてもらったが、この時ほど蜂に感謝したことはなく、そして生涯最高の味だった。

蜂の大量失踪現象「蜂群崩壊症候群(CCD)」が世界的に発生していることが知られ、改めて蜜蜂が注目されるようになった。

玲子さんも環境の変化により、年々飼育がしづらくなっていると痛感している。それでもひとたび巣箱に向かえば、「蜂がどうして欲しいかだけを考えて、私自身も蜂になって仕事をします。一体となってみると、私たち人間も自然の一部なんだと感ずるのです」

今もほぼ一日中、屋外で蜂の世話をしている玲子さん。巣箱が置いてあるのは人里離れた場所ばかり。「いるのは蜂と私とイノシシだけなんて場所もありますが、全く気にならない」と生き生きとした表情で語る。

「損得を考えず養蜂に情熱を注いだ」という多作さんの夢が千葉県特産のビワの蜂蜜を採ることだった。それを四、五年前に玲子さんが苦労の末に実現させた。そして「もうひと花咲かせたい」と六次産業化に取り組み

四月一日、直売所の横に日本公庫から融資を受け、「蜂の駅」をオープンした。採蜜をしたり、ビワ蜜を原料とした加工品づくり、それらが食べられるイートインコーナー、蜜ろうキャンドルづくりの体験工房も併設。「地元の良い素材と蜂蜜を組み合わせ、体にいい商品を届けていきたい」

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

母乳による免疫

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
動物衛生研究所 九州支所 温暖地疾病研究領域長

松原 豊

母

乳による免疫と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。ほ乳動物の乳児にとつて、母乳は唯一の栄養源となります。そして分娩直後には、「初乳」という特別なミルクが分泌されて子に免疫を与えます。

免疫とは、主に細菌やウイルスの感染による病気を防ぐ仕組み・状態で、自然免疫と獲得免疫があります。獲得免疫とは、ある病原体に感染することや、ワクチンを接種して病原体に感染したような状態にすることにより、その病原体に再び感染することを防ぐための仕組みで、抗体やリンパ球がその役割を担っています。自然免疫とは、生体が本来備えている病気を防ぐ原始的な仕組みで、マクロファージや好中球（いずれも白血球の一種）が病原体を食べて（貪食）消化し排除します。近年、自然免疫を担う細胞が病原体を認識する仕組みについて、

盛んに研究がなされています。細胞が持っている病原体成分に対する数多くのセンサーや、獲得免疫との密接なつながりが明らかになってきています。

初

乳には、母の獲得免疫を反映する抗体が多量に含まれていて、子の腸管では出生直後から約二四時間以内は通常吸収できない抗体を取り込むことができます。このようにして子が得た抗体を「移行抗体」と呼び、免疫系の発達が未熟な子にとって病気になる

ないためにはとても大切です。胎盤の構造から、牛やめん羊・山羊、豚、馬といった家畜では胎子期に抗体が移行しませんが、初乳が唯一の抗体供給源となり、移行抗体は時間と共に減少していきます。

一方、初乳を飲むことが問題となる場合もあるので注意しましょう。母親が牛白血病や山羊関節炎・脳脊髄炎などのウイルスに感染している場合、初乳を介して母から子へ病気がうつる危険があります。出生直後に母と子を



母乳を飲む黒毛和種の子牛

分離し、子には加温や凍結融解処理により感染の危険をなくした初乳や代用乳を与えます。このような努力をしても産道や子宮内で感染する場合もありますので、病気のまん延を防ぐには、子が感染していないことを検査で確かめる必要があります。

マウスですが、最近、自然免疫を担う自然リンパ球の産生する化学物質が、腸の上皮細胞に作用し、糖「フコース」と他の糖が連なった長い糖鎖を形成する酵素を作りやすくしていることが分かりました。フコースを末端に持つ長い糖鎖は、サルモネラ感染を防ぐ働きがありました。人の母乳では、フコースが結合したオリゴ糖の割合が高いことが知られています。動物種によって乳成分は異なります。母乳による免疫作用の解明には、腸での免疫系、腸内細菌および乳成分の関わりを理解することが必要です。

F



Profile

まつばら ゆたか
1959年東京都生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程修了後、厚生労働省国立精神・神経センター神経研究所流動研究員を経て、89年農林水産省家畜衛生試験場に入省。主に牛の免疫の研究に従事し、2001年から企画調整部・企画管理部。14年4月より現職。

「田んぼ一枚、差し上げましょうか」

全てはこの一言から始まった。四年前、福島県会津坂下町の「勤労互助新年会」でのことだ。余興で一席落語を終えた私に、町議会議員の一人がそう言ったのだ。商売柄「今度お米一〇キログラムお送りしますよ」とか「地酒です。どうぞお持ち帰りください」などと言われることはあるが、「田んぼ一枚」は話が大きい。

「田んぼ一枚？ どういうことですか？」

地元のおいしいお酒をいただきながら話を聞いてみると、すぐに利益は出なくていいので、農家の皆さんと地域の人と一緒に楽しめるイベントがしたい、と言う。

「田んぼは自由に使っていいですから。皆が元気になるようなことを一緒にやりませんか？」

「面白いですね。マ、私は落語しかできませんが。是非協力させてください」。酔いも手伝って、話は大いに盛り上がった。

そうして「農・商・工」ならぬ「農・笑・工プロジェクト」が始まった。「農業に笑いを。そして地域の人達と交流を深めよう」というのが目的だ。農家の皆さんと役所の職員が実行委員になり、普段農業に縁のない地域の人達を集め、昼間は田植えや稲刈り、そば打ちなどの体験、夜は近くの施設で生の落語を聞いてもらおう、というのだ。

ところが、いざ実行に移そうといった矢先、あの三・一一の大地震が起きた。会津地方の農業は、原発の風評被害で甚大な損害をこうむる。「この計画は立ち消えになるな」と、正直なところ私は思った。しかし、実行委員の皆さんは「こういう時だからこそ自分たちも笑って。そして、地域の人達も笑顔にしよう」と、何とか計画を進めたいと思います」と言うではないか。はじめは思うように人が集まらず苦労したが「こちらが楽しんでいけば、そのうち人も集まってくるだろう」と笑顔を決やさず活動を続けて来た。

そして現在では「農業体験ツアー」を年一回開催し、また、できたお米を「兼好米」と称して東京で販売するまでになった。

——笑顔は強い。このプロジェクト、まだまだ活動が広がりそうである。



落語家
三遊亭 兼好

さんゆうてい けんこう
大学を卒業後、職業を転々としていたが、1998年妻子がありながら、三遊亭好楽に入門。2008年真打ち昇進。国立演芸大賞金賞、彩の国落語大賞など各賞を受賞。現在、独演会ホール落語で活躍中。好きなものは黙っている時の妻子。

農業に笑いを



「T H E日本のど田舎」を舞台にして 「田舎生活」の選択肢を全国に発信中

長野県北安曇郡小谷村

LODEC Japan 代表社員

たつみかずき

過疎・高齢の最先端のむら

「自分の娘が成人したとき、生活の場所として小谷村が選択肢の一つになれるような未来を創りたいんだ」

私が村役場の職員だった頃に信頼する先輩が語り掛けた言葉を、最近よく思い出す。

私の心のふるさとである小谷村は、長野県の最西北、新潟県境の山岳地帯に位置し、北アルプスを有する中部山岳国立公園と上信越高原国立公園の標高二〇〇〇メートルを超える山々に囲まれている。村の南部は、北アルプス山麓にスキー場や関係施設が点在する日本有数のスノーリゾート地であり、北部は古民家群や棚田の原風景が残る風光明媚で「T H E日本のど田舎」という表現がぴったりな、表情豊かな村である。

しかしその小谷村は今、全国の山村地域同様に過疎・高齢と経済縮小の最先端を突き進んでいる。一九五八年、周辺三村が合併し小谷村は誕生し

た。村人の多くは、農耕作や畜産の第一次産業と雪深くなる冬期間は造り酒屋への出稼ぎによる収入が主であった。「この集落は、おれの若え頃には二二〇人が暮らしてたんだ。祭りの狂拍子はこの集落のもんだ」。今では二世帯四人を残す集落の男前のじいちゃんはどう話す。

里山のとっぺんには田んぼや炭焼きの跡が残っている。植物に浸食された石段の上にはお宮があったはずだし、屋根の茅から木が生えている崩れた古家にも人々の営みが繰り返されていたはずだ。スキー場の近辺にはかつて十数カ所のデイスコもあったし、雪の中、ミニスカートにヒールで風を切って歩く都会の流行だつて存在したし、九八年に開催された長野オリンピックで日本スキー団が栄光ある勝利を勝ち取った隣村のジャンプ台までは車で三〇分とかからない。

しかし、合併当時の人口八〇〇〇人から現在は三〇〇〇人まで、観光が中心となっている村の経済も長野オリンピック開催を最盛にそれぞれ減

少しており衰退の一端をたどっている。

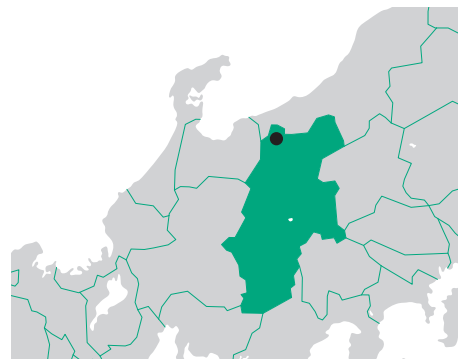
私は、もともと大阪出身だが、小学四年生から小学校卒業まで、山村留学という制度でこの村に暮らしていた。親元を離れた子どもたち一五人ほどと数人の指導員で寮生活をし、村の小学校に通っていた。父親が幼少時代を過ごした田舎を息子にも経験させたいと出したのである。

それまで、両親母が徒歩圏内に暮らしていたため、私は自身の田舎というものがなかった。田舎とは、テレビの中と友人の夏休みの絵日記の中でのみ存在するものであった。

山村留学した田舎に移住決意

寮から学校までは、片道四キロメートル、徒歩で約一時間の道りであった。通学路の正面には、毎朝、北アルプスの乗鞍岳が大きく構えていた。

自然しかない環境で、俗物的なものを全て排除した生活の中、何もない空間にいかにも楽しみを見出すか、ということを考えて田舎生活を謳歌した。



profile

たつみ かずき

1986年生まれ大阪出身。小谷村中心に生業を創り出す絶賛発展途上中の若輩者。山村留学で小学4年生から3年間、小谷村で過ごし、村に惚れ込む。2009年に移住。元小谷村役場職員。11年棲家である小谷村の古民家を宿とし「古民家ゲストハウス梢乃雪」の運営を開始。2015年4月にメンバーと共に「LODEC Japan」を設立。

LODEC Japan

北アルプス山麓を拠点に「田舎に、'来る' '棲む' '働く' を、創る」会社。古民家ゲストハウス梢乃雪、ゲストハウスカナメ、シェア&コミュニティハウスmetoneの運営および民間の移住相談サロン、職業紹介窓口を開設している。田舎を棲家とし生業を創り出し、家族を築き生きていく方法をメンバー全員と私たち同様に田舎を営みとする人々とともに模索している。
HP: <http://lodec.jp/>

小学校を卒業し大阪に戻ると、私には今まで存在していなかった田舎とふるさとができたということを感じた。

その後、学校は統合により取り壊され山村留学制度も休止となった。帰る場所を失い、どんどん疎遠となっていくふるさと。郷愁の想いは、ついに小谷村移住を考えさせた。

そんな時、定年を機に小谷村へ移住すると父親が切り出した。能動的と受動的が半々ではあったが、私自身も同じ気持ちだったので、父と小谷村へ移住することにした。二〇〇九年三月、現在の棲家となっている小谷村中谷郷の古民家に、私たちは暮らしの拠点を移したのである。

移住して地域を見つめると、山村留学の時代から村は確実に年老いていることを実感した。

かつての学友は片手を数える程度しか地域にはおらず、よく悪さをする子どもを怒鳴っていたじいちゃんも記憶を無くしていた。

何か行動を起こさなければ地域が無くなってしまふのでは、と私は焦りと不安を覚えた。翌年、私は小谷村役場の正規職員となった。税務係配属となり、村や住民がおかれている状況を、数字を通して知った。私はむらづくりに従事できないだろうかとの思いが強くなっていった。

「来る」「棲む」「働く」を創る

そんな時、村が地域おこし協力隊制度の導入を開始した。二〇一二年、私は役場を退職し、地域おこし協力隊と共に活動する「小谷村の集落支援員」となった。村の情報発信や山菜やキノコの生

産団体との協働、結婚対策の観点から婚活イベントの企画など、むらづくりに関わることとなった。しかし、集落支援員という公の業務を預り活動を進める中で、私はこんなことを感じるようになった。「地域は地域の変革を望んではいない」と。

国の中心から発せられる地方創生のうねり。これは実際に日本中の地域に波及しており、小谷村を含む北アルプス山麓地域のほとんどが、昨年発表された日本創成会議・人口減少問題検討分科会の推計による消滅可能性都市に名前が挙げられている。そのため、各自自治体に温度差はあれど、焦りから生まれる前のめりの姿勢と行動が確かに生まれている。ただ、実際に地域の住民ベースに落とし込んだ時に、それらはあくまで「行政仕事」と考える人々がほとんどなのである。



上：古民家ゲストハウス梢乃雪の2階から、みんなでピース！
下：梢乃雪の玄関から望む景色

公の立場として「地域を元気にしましょう！」と語る自分。それらを求めない地域住民。移住者を招き入りたいと自発的な行動をする集落は、私が担当する地域の集落では一つもなかった。

時代の流れは、その渦中の地域を置き去りに進んでいる。公の自分と、自身も村民であるという葛藤。私は「地域おこし」を辞めることにした。「地域をおこそうとするのではなく、自分自身の己欲求で地域を元気にしよう」と。

人々が地域に入る仕組み作り

私は「地域」をなんとなく大きく、自分とは少し離れたところ感じていた。行政として公の自身は、あくまで公平で平等に地域を見るべきであり、なによりも規模が大きなものであることに変わりはない。

しかし、地域を構築するものは、土地という物質的なものではなく、そこに住み、営みを築き上げている住民一人一人であるのだ。それならば、私自身も住民そのものなのである。そこで、私は「一村民としてできること」を命懸けでやることにした。自身の棲家で古民家を宿として田舎を求める人々が来ることのできる「田舎の入口」となる場所作りを開始したのだ。宿は、晩秋に葉を落とした木々の枝先の「梢」に「雪」が積もるさまを表現した「梢乃雪」という情緒をまとった小谷に似合う名を付けた。

「なにもないが、ここにある」わが家の縁側から望む景色など都会では存在しない贅沢な「無の空間」を存分に味わえる田舎の家に、多くの人々が足を運ぶようになったのだ。

空家利用が認められ、一四年には小谷村よりも南に位置する大町市の中綱湖畔にある空家で「ゲストハウスカナメ 梢乃雪 二号館」を開業した。

また、今年は大町市中信濃大町駅前の空家で「シェア&コミュニティハウス Eelone」開業と移住相談窓口および職業紹介窓口の運営を行う事務所開設することとなった。

これらは、いずれも地域活性化や移住を理論や議論で語るためではなく、「人々がリアルに地域に入る仕組み」を模索し創造するための場所にしたと考えているものなのだ。

今年四月にはこれまで個人事業で行っていた業務を法人化し「合同会社 JODEC Japan」を仲間と共に立ち上げた。From 田舎 to Japan をテーマに掲げ、田舎の潜在価値を発信し、棲家も生業も選択することができ、これからの新しい日本を創造する一端を担いたいと考えている。

田舎や地方とそれらを求める人々のつながり創りに関わる全てを業務と捉え、「田舎の入口」「田舎の棲家」「田舎の生業」を創ることを事業とし、入口となる宿泊業や田舎ツアーの企画、棲家として田舎を捉えるためのシェアハウスの運営や移住相談窓口の運営、生業を生み出すための職業紹介窓口の運営や地域企業コンサルタントなどの事業展開を考えている。

これから田舎は面白くなる

先輩の言葉のように、現在、「田舎という選択肢」が、ほとんどの田舎には存在しない。そして、田舎で生まれ育った若者が都会へと移ってしまふことが当たり前のこととなっている。

しかし、田舎も都会も、棲家も生業も、一人一人が選択できる未来の創造が必要なのである。自分の子供が、自分の生まれ育った地域を棲家とする「選択肢」の一つとして捉えられるような未来を、この田舎を棲家とする私たちは創造しなければならぬのだ。

現状の活動とこれからの活動で、私たちは「田舎に、来る・棲む・働くを、創る」ことを生業とする。田舎の入口を広げ、田舎での棲家と生業創りを、田舎を求める人々と共に取り組んでいく。人々が求める「田舎という選択肢」ができる未来を創り上げていきたいのだ。

これから田舎がどんどん面白くなっていく。漠然とだがそう、感じている。

私たちは過去から縮小する今を嘆いている暇はない。これからの創り上げるべく未来へと一歩を踏み出さなければならぬのだ。時代は変わる。間違いなく変わる。そう信じて、アクションを起こすことが大事だ。

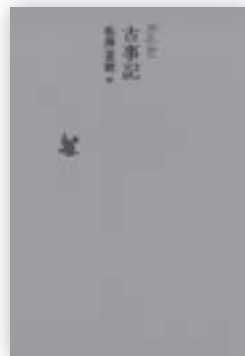
日本各地の地方と田舎ではさまざま取り組みや活動が広がっている。集落の古民家では宿や飲食店が生まれ、伝統工芸は新しい利用価値が見出され、次世代の就農者は新たな販路を獲得し商品開発に取り組み、商店街ではシャッター店舗を活用し地域コミュニティとなっている。

日本各地の地方と田舎からふつと火を付ける火種が、そろそろ燃え広がるとしているのだと私は感じている。

そして、これからの時代を創るのは、国や行政ではなく、私たち地域に棲まう一村民や、一住民であるのだ。私は、この小谷村で、それを実感する。

『古事記』

池澤夏樹訳



(河出書房新社・2,000円 税抜)

農の上に花咲いた神話

宇根豊
(百姓)

池澤夏樹の新訳が出たというので、私も初めて古事記を最初から最後まで読んだ。再発見の連続だった。何と高天原^{たかまがはら}では、稲が栽培されており、当然神々が耕作に従事していたのである。したがって罪の中でも最も重い「天つ罪」とは、畦を壊したり、水路を埋めたりするような、農耕を妨害することだということも納得できる。

アマテラスも養蚕と織物をしていただけだから、結構働き者だったようだし、神と人との間には、さして違いは見当たらない。

それにしても、次から次に生まれてくる神の名前を読んでいると、「八百万の神」というものが実感できる。その名も農耕に由来するものが目立つ。特に「穂」が付く神が多いのには驚く。そもそも、イザナキとイザナミが産んだ一番大きい島が「秋津島^{あきつしま}」と命名されている。池澤は脚注で、ちゃんと

「アキツはトンボ。トンボが飛びながら交尾している姿は豊穡の秋の象徴として尊ばれた」と説明してくれている。

このトンボは赤トンボで、ほとんどが田んぼで生まれるのだから、「秋津島水穂の国」とはよく言ったものだ、改めて感心する。トンボに対する情愛は、下巻の雄略天皇の記事にも現れる。天皇の腕をアブが刺した。すると、蜻蛉^{あきつづ}がそのアブを喰って飛び去った。そこでこの国を「蜻蛉島^{あきつしま}」と呼ぶようにした、というのだ。

それにしても古代の天皇はよくため池を造っている。政治の中心は田んぼに水を確保して、農を繁栄させることだったのだ。古事記は天皇の系譜を残すのが目的ではなく、農耕の価値観、世界観を語ることが主眼だったのではないか。そもそも最初の神は、泥の中から葦^{あし}の芽のように生まれてきたのだから、農耕そのものだ。

それにしても、戦いと女性をめぐる争いの多いことにはあきれられる。そこで、はたと気付いたのは、天皇に滅ぼされていった者たちの語りの方が圧倒的に魅力的だということだ。スサノヲ、大國主^{おおくにぬし}、倭建^{やまとけん}など悲劇の主人公である。日本書紀とは違って、古事記は「負け組」の側に寄り添っている。先入観抜きに読み直してみるといい。

池澤の新訳は読みやすいし、脚注も面白い。「仏教が殺生を禁じるまでは、豚は日本でも広く食べられていた」「ウタゲはウチアゲ、すなわち酒を飲んで手を拍ち上げて盛り上がること」などなど。本当に勉強になった。

読まれます 三省堂書店農林水産省売店 (2015年3月1日～3月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農山村は消滅しない	小田切 徳美/著	岩波書店	780円
2 コメをやめる勇氣	吉田 忠則/著	日本経済新聞出版社	1,800円
3 農業と経済2015年3月臨時増刊号 第81巻 第2号 食料・農業・農村基本計画の見直し 新しい基本法以降15年間の検証から見えてくるもの		昭和堂	1,619円
4 Wedge2015年4月号 減びゆく農協 岩盤規制と農業の行方		株式会社ウェッジ	463円
5 史上最強カラー図解 プロが教える農業のすべてがわかる本 日本農業の基礎知識から世界の農と食まで	八木 宏典/監修	ナツメ社	1,500円
6 続・農業と農政の視野 論理の力と歴史の重み	生源寺 眞一/著	農林統計出版	1,800円
7 日本人が知らない漁業の大問題	佐野 雅昭/著	新潮社	700円
8 水圏の放射能汚染 福島の水産業復興をめざして	黒倉 寿/編	恒星社厚生閣	2,800円
9 週刊ダイヤモンド2014年11月29日号 JA解体 農業再生		ダイヤモンド社	657円
10 牛をすこし深読みしてみると	増田 淳子/著	農林統計協会	1,800円

エリア限定商談会で販路開拓を支援

個別商談会「第二回農と食の出会い」が、三月三日に東京都渋谷区内において開催され、日本公庫帯広支店のお客さま七社にご出展いただき、バイヤー一六社が参加しました。

主催者である特定非営利活動法人日本プロ農業総合支援機構（JPAO）の山下望氏から寄稿いただきましたので、ご紹介します。

*

JPAOは、プロ農業者の多様な経営課題解決のため、会員企業ノウハウを活かした総合的なサポートを行っています。特に近年は農産物やその加工品の販路に



バイヤーと1対1で、味やパッケージデザインといった商品の魅力をアピール

関するご相談が増加しており、アグリフードEXPOなど大規模な商談会への出展をサポートし、ご相談者から一定の評価をいただいております。

一方で「希望するジャンルのバイヤーのみを集めて、効率的に商談したい」「じっくり商談できる機会や情報収集のための時間がほしい」「試食については、ひと手間かけて調理し、商品の魅力を伝えられる形で提供したい」という声もありました。

こうした相談を受け、商談時間を確保し、かつ適切な調理によって商品の魅力を伝えられる形で試食が準備できるようキッチン付きスタジオを会場とする小規模な商談会を企画。昨年一〇月に第一回を開催しました。

第二回目となる今回は、出展者の対象を北海道十勝地域に限定。その背景には、第一回開催後のバイヤーからの意見として、地域絞り込みの必要性が挙げられていたこと、そして二〇一三年度から当機構と日本公庫帯広支店が連携して、十勝地域の生産者の個別サ

ポートや交流会の企画などを行っており、販路の開拓が生産者の経営課題として浮き彫りになっていくことがあります。

の個別商談会の特長として、一つは出展者や出展商品、取引を希望する業態（小売り、外食、通販など）に関する情報収集を事前に行い、これらに応じた業態・業態のバイヤーを誘致した点です。今回ご参加いただいたバイヤーは、

都内に本店を構える高級百貨店グループ三社をはじめ、大手通信販売六社、食品卸売五社、有名レストランチェーン一社、食品宅配サービス一社など合計一六社で、いずれも十勝地域の食材に関心のある企業です。

そしてもう一つは、バイヤーの希望を踏まえて事前に時間割を設定し、商談の機会を確保した点にあります。一六社のバイヤーが商談を希望した出展者と一組三〇分間、延べ六一組の商談を行いました。

出展者の業種は肉用牛、養豚、酪農、畑作など幅広く、どの出展者も六次産業化に取り組んでいるため農産品だけでなく、それぞれが自信を持つ加工品も出展しました。各出展者は、販路開拓はもろろん

のこと、今後の商品開発のための情報収集、地域ブランディングの仕組みをパッケージとして提案するなど、この機会を積極的に活用していました。

JPAOは商談会の経験が少ない出展者に対して、商品提案書の作成などを事前レクチャーし、商談会当日は日本公庫担当者と共に商談が円滑に進むよう試食提供などをサポートしました。

開催後に行ったバイヤーへのアンケート結果によると、全てのバイヤーから「満足した」「生産者と直接話ができ、勉強になった」「こだわりやストーリー性を感じられた」などの意見が寄せられました。また、今後の取引意向については「全ての出展者と取引を検討している」と回答したバイヤーや、既に成約したケースも見受けられ、参加したバイヤーの全てが、いずれかの出展者一社以上の商談を継続しています。

今後は、これまでご参加いただいた出展者やバイヤーの意見を参考に、販路開拓や情報収集の場として、皆さまにご活用いただけるよう次回開催を検討しています。

（日本プロ農業総合支援機構

山下望

プロ農業者たちの国産農産物・加工食品展示商談会
第一〇回「アグリフードEXPO東京2015」を開催します

日本政策金融公庫は、八月一日(火)、一九日(水)に東京ビッグサイトにおいて第一〇回「アグリフードEXPO東京2015」を「6次化の先駆者」EXPO仲間大集結」をテーマに開催します。

出展者の皆さまには、国産農産物および加工品を個別出展ブースに展示していただき、来場される各業種のバイヤーの皆さまと商談に臨んでいただきます。開催規模は七五〇小間を予定しています。出展者の募集期間は、五月一日(金)までです。

なお、申し込み小間数が収容上限に達し次第、受け付けを終了させていただきます。ぜひ、お早めにお申し込みください。

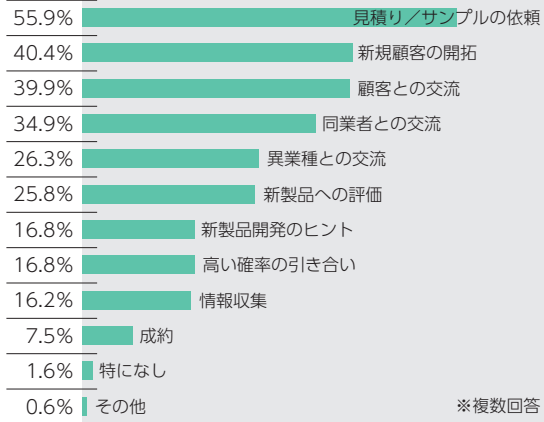
詳細は、公式ホームページ(<http://www.exhibitiontech.com/afx/index.html>)をご覧ください。

また、第九回「アグリフードEXPO東京2014」にご参加いただいた出展者・来場者のアンケート結果は下図の通りです。

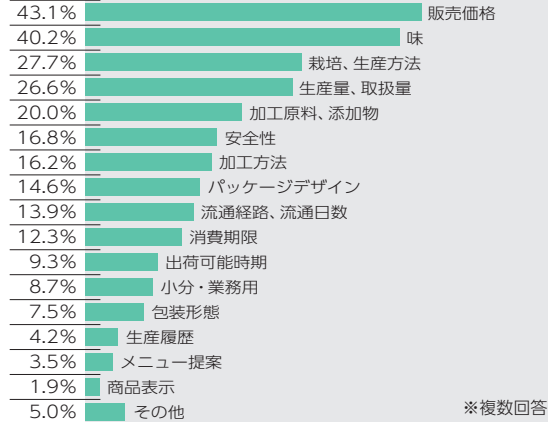
(情報企画部)

前回(2014年)の出展者アンケート結果

■出展者数…合計/624社 510小間 ※共同出展者含む
 ■会期中商談件数…1社平均/14件 最高/200件
 出展の成果は？

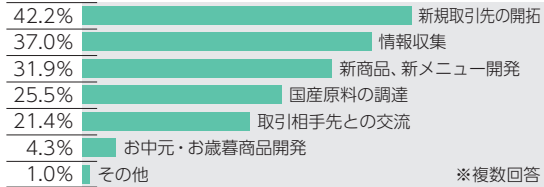


■会期中成約件数…1社平均/4件 最高/60件
 ■成約金額…1社平均/151万円 最高/3,000万円
 来場者の関心は？

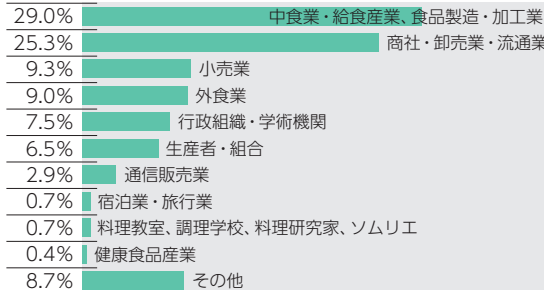


前回(2014年)の来場者アンケート結果

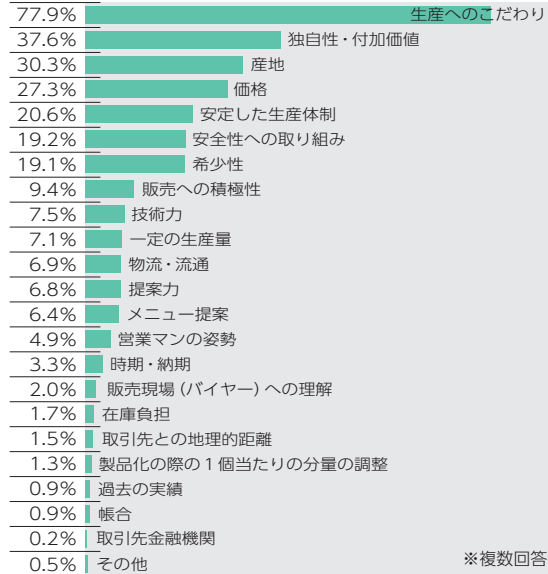
■登録来場者数…12,698名
 来場の目的は？



あなたの業種は？



取り引きで重要視する点は？



風評被害克服に向け 個別商談会を実施

一月二八日、福島市にて、福島県農業会議、うつくしまふくしま農業法人協会との共催で「フードネット・イン福島」を開催し、農業者や食品加工業者など総勢九〇人にご参加いただきました。

風評被害などの影響を受けている農業者の販路開拓の場として、初めて個別商談会を開催し、農業、食品関係業者二六者が参加して計四三件の商談を行いました。

セミナーでは、株式会社ファームステッド代表取締役の長岡淳一氏から商品販売におけるデザイン的重要性について講演をいただきました。

(福島支店)



熱気に包まれる商談会会場

公庫資金への理解を深める 研修会を開催

二月三日、「公庫資金受託業務及び農業経営アドバイザー研修会」を開催し、群馬県内の受託金融機関担当者や農業経営アドバイザーなど五七人にご参加いただきました。

J Aの実務担当者を対象とした公庫資金受託業務研修会では、融資手続き上の注意点を具体的な事例に基づき説明。その後、業務協力を締結している群馬県畜産協会の高橋健一郎氏から、畜産経営の見方について講演いただきました。

参加者からは「畜産経営を分析する上での悩みが解消されました」などの声が寄せられました。

(前橋支店)



参加者は興味深い講演に聞き入りました

再建遂げた企業のリーダーが 漁業関係者の会で講演

二月二日、長崎市にて「長崎県公庫水産友の会」を開催し、県内の漁業経営者や漁業関連企業など総勢七〇人にご参加いただきました。

講演会では、東洋工業(現マツダ)株式会社の前取締役で、債務超過にあった自動車部品会社に転出して、わずか三年で再建を果たした稲林章氏から、「意識が変われば会社が変わる」トップの自覚と行動が人を動かす」との演題で、実践に基づいたリーダーの心得について講演いただきました。続く懇親会では、講師も交え、活発な情報交換が行われました。

(長崎支店)



講演に熱心に耳を傾ける参加者

「やまぐち六次産業化・ 農商工連携研修会」を開催

二月二四、二五日、やまぐち農林振興公社との共催で、六次産業化・農商工連携研修会を開催し、公庫のお客さまや関係機関など総勢一〇七人にご参加いただきました。

第一部では宮城大学名誉教授で食品表示部会委員を務める池戸重信氏に「新食品表示法のポイント」について、続いて第二部では六次産業化プランナーの岡本弘正氏から「食品を扱うリスク・予防対策」について講演いただきました。

新食品表示法や食の安全と時宜にかなったテーマであり、講演後も講師への質問や相談が相次ぎ、好評を得ました。

(山口支店)



研修会会場は満員で関心の高さがうかがえました

「農の雇用事業」で 人材育成・経営発展へ

農林水産省では、経営発展を目指す農業法人や農業経営者が新規就農者を新たに正社員（採用日時点で原則四五歳未満の方）として雇用し、農業技術や経営ノウハウなどを習得させるための実践的な研修に対して支援を行う「農の雇用事業」を実施しています。

本事業にご応募いただき、採択された際には、研修生一人当たり年間最大二二〇万円、最長二年間の支援が受けられることとなります。

二〇一三年度には、規模拡大や六次産業化など新たな人材の雇用が必要となる方々をはじめ、経営発展を目指す三〇〇〇経営体を上回る法人などにご活用いただいています。

また、本事業では、新規就農者に対する研修費の支援と併せて、研修指導者自らが人材育成手法や労務管理などを習得するための指導者研修費として、年間最大三万六〇〇〇円の支援が受けられます。地方自治体や民間会社が開催する研修セミナーの参加費用にも使えますので、指導者の管理能力および研修生の定着の向上を図るため積極的に活用ください。

本年度は、四回の募集を予定しており、今回は第三回として八月から研修を開始する農業法人などを対象に、五月二十九日（金）まで（予定）募集しています。

次回、第四回募集は八〜九月で、研修開始は二月予定です。

なお、事業参加に当たったての主な要件は次の通りです。

- 一四年一〇月二四日以降に正規の従業員として雇用し、申請日までに就業しており、一週間の所定労働時間が三五時間以上であること。

● 研修生の過去の農業従事経験が五年以内であることなどです。

また、農業法人の設立による独立を目指す者を雇用して実施する研修に対して支援する「法人独立支援タイプ」も併せて募集しています。

新たに雇用した新規就農者のスキルアップを図りたい、雇用就農者を増やしたいと考えている農業法人などにおいては、本事業の活用をぜひご検討ください。また、周囲で事業活用を希望する方にもご紹介ください。

詳しくは全国新規就農相談センター
HP: <http://www.nca.or.jp/Befarmer/nounokoyou/> をご覧ください。

● 交叉点 ●

アジアの農業金融関係者が 奈良県の先進農業を視察

日本公庫は二月二〜一九日の八日間、アジア太平洋農村・農業金融協会（APRACA）※に加盟するバングラデシュ、インド、カンボジア、フィリピンの農業金融関係者一三人を研修生として受け入れました。

研修生は、まず日本の農業の状況や農業金融の概要と日本公庫農林水産事業の業務、農業協同組合制度などについて講義を受講しました。

その後、奈良県の有限会社王隠堂農園グループ、植村牧場株式会社、有有限会社山口農園を訪問し、先進的な六次産業化の取り組みや有機農業について学びました。さらに、大和高原北部土地改良区を訪問しました。研修の最終日は大阪に移動し、アグリフードEXPOを視察して、農業生産物のビジネスマッチングの仕組みについて見識を深めました。

研修後、参加者からは「農産物の生産・加工・販売まで一貫して行う

ことにより、地域農業者の所得向上に資する取り組みは大変勉強になりました」「自国の農業・農村の振興や発展にとって、とても参考になりました」などの感想が寄せられました。

本研修にご協力をいただいた皆さまに改めてお礼申し上げます。

※アジア太平洋地域の農業・農村金融制度の改善を図るため、情報交換や研究・教育など交流活動を行う機関です。

（奈良支店・情報企画部）



山口農園社長の山口貴義氏の話に聞き入る研修生

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する「AFCフォーラム」「アグリ・フードサポート」のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

◆三月号の裏表紙の西口秋楓さんの「千まい田」は、「よくぞ上手に描いた」と感嘆いたしました。輪島市の小学校の児童が描いたのだから、能登半島の有名な白米の「千枚田」だと思えます。あの日本海に落ち込むような急な斜面で、海風が強く吹き込む猫の顔ほどのスペースの田を何枚も段々に作り上げ、長年耕作してきたものだと言います。

実は私も広島県北の農村で子供時代を過ごして、狭い谷間の棚田や段々畑で農業の手伝いをした経験があります。

近年、田畑は耕運機が稼働しやすいうように整備され、農業労働も格段に楽になってきました。しか

し、日本農業の文化が古代から連続と続き、日本の主要産業であり続けたことの証左として、白米をはじめ各地に残る千枚田は貴重な農耕文化遺産として大事に残してもらいたいと願っています。

(広島市 内刈)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。

「郵送およびFAX先」
 〒〇〇〇〇〇〇四
 東京都千代田区大手町一丸一四
 大手町フィナンシャルシティノースタワー
 日本政策金融公庫 農林水産事業本部
 AFCフォーラム編集部
 FAX 〇三三三三三〇一三三三〇

編集後記

◆今号より編集長を拝命いたしました。引き続き私たちに求められているものを、分かりやすい内容で提供してまいります。さて、本号は水田農業の特集です。内外の劇的な環境変化に柔軟に対応し、成長を続けている経営者の方々に頭が下がります。古来より受け継いだ美田を絶やさぬよう、微力ながら支えになる所存です。(嶋貫)

◆神の贈り物とされる蜂蜜。しかし現在、それをいただくには「農と食の邂逅」の尾形さんのような養蜂家の頑張りが不可欠です。仕事がかついつい言いながら、蜂に魅せられている尾形さんは、父の多作さんのDNAをしっかりと受け継いでいるんですね。一生、蜜蜂と共に暮らす尾形さんの「蜂の駅」を訪ねてみてください。(小形)

◆この冬、わが家で大人気の果物はミカンでした。スーパーでは全国各地のミカンが果物コーナーの一角を占めお客さままでにぎわっていました。ところがある日、ミカン売り場が消え、ミカンの姿も見えなくなりしました。春も近づき、ミカンの旬も過ぎたのだなあと感じました。食べ物の旬を知ることが心が豊かになりますね。(城間)

◆高齢化や担い手不足などにより増加している耕作放棄地が、全国のさまざまな地域で喫緊の課題となっています。その中で、特集を執筆していただいた横田さんや「変革は人であり」で紹介した高井さんのように、農地を守る方がいます。農地を農地として次代に残すためには、彼らのような存在が不可欠だと思います。(林田)

AFCフォーラム Forum

編集

大本 浩一郎 嶋貫 伸二 清村 真仁
 小形 正枝 飯田 晋平 城間 綾子
 林田 せりか

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
 Tel. 03(3270)2268
 Fax. 03(3270)2350
 E-mail anjoho@jfc.go.jp
 ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

(一財)農林統計協会
 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
 目黒・炭やビル
 Tel. 03(3492)2987
 Fax. 03(3492)2942
 E-mail publish@aafs.or.jp
 ホームページ <http://www.aafs.or.jp/>

定価 514円(税込)

◆ご意見、ご提案をお待ちしております。

◆巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結



アグリフード EXPO 東京 2015

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時 8月18^火日/19^水日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催 JFC 日本政策金融公庫

会場 東京ビッグサイト 西1・2ホール



10年先の水田農業を描く



『水の国』飯田 莉央 千葉県多古町立常盤小学校

■AFCフォーラム 平成27年5月1日発行(毎月1回1日発行)第63巻2号(777号)
■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売/一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■定価514円

■本体価格476円

